

国際プログラム部門 短期日本語プログラム (NUSTEP) 2017年度実施報告

国際教育交流センター国際プログラム部門

松 尾 憲 暁

1. はじめに

本学では1996年から半年または1年の短期交換留学プログラム (NUPACE) を実施してきたが、近年、海外協定校より数週間のプログラムの要望が高まってきたことを受け、2016年2月より2週間の日本語プログラム (NUSTEP) を実施している。

プログラムの実施にあたっては、2014年9月に国際教育交流センター、国際言語センター、国際学生交流課 (現・学生交流課) 有志からなるワーキンググループが立ち上がり、2015年4月にはNUSTEP運営委員会が設置され、準備を進めてきた。今年度の委員会の構成メンバーは、Matthew Linley、徳弘康代、初鹿野阿れ、伊東章子、坂井伸彰、松尾憲暁 (以上、国際教育交流センター)、古谷礼子、曾剛 (以上、工学研究科)、牛田正敏、山田利幸 (以上、学生交流課) である。

本稿では2017年夏季 (以下、夏季)、2018年春季 (以下、春季) のプログラムについて報告する。

2. 期間と参加者

夏季は7月13日から27日まで、春季は2月8日から22日まで、それぞれ2週間にわたり実施した。NUSTEPは、名古屋大学と学術交流協定を締結している大学に所属している、中級レベル (日本語能力試験N3～N2相当) の日本語力を有する学生を対象としている。書類審査、語学力等の選考を経て、夏季は15大学から29名、春季は13大学から29名の学生が参加した。なお、応募者数は夏季が50名、春季が33名であった。参加者の内訳は以下の通りである。

〈夏季〉

高麗大学1名、国立台湾大学3名、国立清華大学1名、

国立中正大学1名、ハルビン工業大学2名、南京大学3名、吉林大学2名、中国科学技術大学2名、華中科技大学3名、大連理工大学1名、香港大学2名、香港中文大学1名、西オーストラリア大学2名、カセサート大学4名、インドネシア大学1名

〈春季〉

ソウル国立大学2名、国立清華大学2名、国立政治大学1名、国立中正大学1名、国立台湾大学3名、南京大学4名、ハルビン工業大学3名、中国科学技術大学3名、同済大学2名、華中科技大学2名、東北大学2名、浙江大学3名、ホーチミン市法科大学1名

3. 目的

NUSTEPは2週間の滞在を通じ、日本や名古屋大学に興味を持ってもらい、将来の交換留学や大学院進学に繋げることを目的としている。そのため、内容の学術性を重視している。このことを踏まえ、以下の3点をプログラムの目標に設定した。

- ①日本語を使って日本の文化・社会についての自分の考えを発表する。
- ②体験や交流を通し、日本の文化・社会を理解する。
- ③名古屋大学の教育や研究を体験する。

4. 内容

プログラムは、1)日本語、2)エクスカッション、3)日本研究①「伝統と文化」、4)名古屋大学学生との交流会、5)日本研究②「ものづくり」、6)専門講義/ラボ見学、7)日本研究③「愛知県の産業」、8)日本研究④「現代社会と若者」、9)ホームビジット (参加は任意)、から構成されている。

表 全体スケジュール (2018年春季の例)

日程	午前	午後
2/8	入寮	
2/9	開講式, オリエンテーション	歓迎会, クラス分け, 大学紹介
2/10	エクスカージョン (瀬戸・犬山)	
2/11	休み	
2/12	日本語:名古屋と中部地域	日本研究①「伝統と文化」 名古屋大学の学生との交流会
2/13	日本語:日本事情 (社会・文化・人)	日本研究②「ものづくり」
2/14	日本語:日本の文化 【発表1】	専門講義・ラボ見学①
2/15	日本語:日本のモノづくり・ 人作り	日本研究③「愛知県の産業」
2/16	日本語:インタビューの仕方 【発表2】	日本研究④「現代社会と若 者」
2/17, 18	市内視察 (希望者のみ) / 休み	
2/19	日本語:インタビュー報告 【発表3】	専門講義・ラボ見学②
2/20	日本語:最終発表準備	自主学習
2/21	最終発表	修了式, 歓送会
2/22	退寮	

(1) 日本語

NUSTEP は本学での単位を付与することはできないが、協定校で単位認定が行えるように1コマ90分×16回(修了試験含む)で日本語の授業を構成し、成績評価を行う。評価は出席20%、授業中の課題30%、修了試験(最終発表)50%とし、3分の2以上の授業への出席を必要としている。

授業は夏季を鈴木かおり先生と福富七重先生と安井朱美先生に、春季を加藤淳先生と宗林由佳先生にご担当いただいた。プログラム初日の午後に、作文と面接試験からなるクラス分けテストを実施し、その結果を踏まえ、全体を2クラスに分けた。

クラスは異なっても、扱うトピックは同じであり、段階的にアカデミックスキルが習得できるように授業を組んでおり、2クラス合同の授業も行なっている。また、午後の講義や活動と有機的に結びつくようなコースデザインとなっており、学生は午前の日本語の講義で学んだことを午後の講義や活動で深め、翌日の授業で日本語を使って報告するというサイクルを繰り返した。

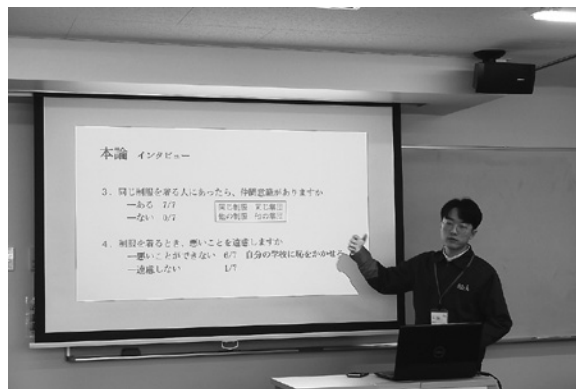
授業では教師の授業を聞くだけの受動的な学習ではなく、グループ学習などの活動を多く取り入れ、主体的に学習に取り組むことを促した。さらに、授業のうち数回は、本学の学生ボランティアに参加してもら

い、意見交換等を行う活動も行った。

最終日には、期間中に学んだことの中から各自でテーマを選択し、自身の考察を加えたプレゼンテーションを行った。

〈最終発表会のタイトルの一例〉

- ・日本の大学生の挨拶用語
- ・日本人の宗教観
- ・日本の教育問題－「不登校」について－
- ・日本とインドネシアの交通機関の比較
- ・日本と中国の高速鉄道に関する比較、大学生の考え



最終発表会

(2) エクスカージョン

愛知県の歴史・文化・社会について学ぶため、夏季は犬山を、春季は瀬戸と犬山をそれぞれ訪問した。

夏季は、犬山市の明治村を訪ね、明治時代の歴史的建造物を見学しながら、当時の社会や文化について学んだ。その後、犬山城とその城下町を散策後、日本のものづくり文化の根源に触れるため、城下町にあるからくり展示館を見学した。

春季は、瀬戸で愛知県が誇る陶器文化を学ぶため、招き猫ミュージアムを見学し、その後、陶芸教室にて招き猫への色付け体験を行った。犬山では、夏季と同様に、犬山城とその城下町を散策後、からくり展示館を見学した。

(3) 日本研究①「伝統と文化」

日本文化の体験として着付けと書道を体験した。着付けは、NPO法人ひとつなぎ駒の加藤かつ子先生に、男女1名ずつの学生代表への着物の着付けを実演と合わせ、着物文化についてご講義いただいた。その後、学生全員に浴衣の着付けを行ったが、その際、駒

Kimono creat の有志の皆様、河嶋春菜先生（国際教育交流センター海外留学部門）にもご協力いただいた。

書道は、徳弘康代先生（国際教育交流センター国際プログラム部門）にご指導いただいた。漢字圏の学生が多かったため、漢字ではなく、ひらがなを題材として取り上げた。手本を見ながら筆運びを練習した後、自分の好きな文字を書くことにも挑戦した。

（４）名古屋大学の学生との交流会

本学の学生との交流会を授業開始日の夕方に実施した。夕方ということもあり、学生の参加は任意としたが、ほとんどの学生が参加していた。交流会には学内のサークルを招き、サークルの紹介と実演、体験、フリートークという流れで進めた。夏季は、「混声合唱団名古屋大学コール・グランツェ」、春季はよさこいサークル「快踊乱舞」にお越しいただいた。上記のサークルのメンバー以外にも本学の学生や、夏季はホストファミリーの名古屋大学附属中学及び高校の学生、春季は寮生である愛知東邦大学の学生が参加し、体験や会話を楽しんだ。

（５）日本研究②「ものづくり」

有松にある絞り会館を訪問し、愛知県の伝統産業の一つである有松絞りについて商工協同組合の方々より説明を受けた。その中では、伝統産業を残すために、企業とも協働して新たなことにもチャレンジしているという話を伺うことができた。その後、学生は絞り作りを体験してから、商工協同組合の方々の案内で有松の伝統的な町並みを散策した。



有松の町並みについて説明を受ける学生たち

（６）専門講義／ラボ見学

本学の実際の教育・研究を体験してもらうために、本学教員による専門講義と学内の研究施設の見学をプログラム中に２回実施した。

一回は文系と理系に分かれて実施した。文系は伊東章子先生（国際教育交流センター教育交流部門）による「鉄道網の発展と日本の近代化」の講義。理系は曾剛先生（工学研究科）による「自動運転技術」の講義を受講した後、夏季は未来社会創造機構の車両台上特性評価室を見学した。見学の際は、青木宏文先生（未来社会創造機構）にご説明いただいた。春季はトランスフォーマティブ生命分子研究所（ITbM）を訪問し、佐藤綾人先生、Jacky C.-H. Yim 氏、遠藤仁氏にご講義いただいた。その後、同先生方にご説明いただきながら、研究所内を見学した。

もう一回は文系理系の学生合同で減災館を訪問し、Emanuel LELEITO 先生（工学研究科）による防災に関する講義を受講。その後、同先生にご説明いただきながら、館内を見学した。

（７）日本研究③「愛知県の産業」

愛知県のものづくり文化について学ぶため、その代表とも言えるトヨタの関連施設であるトヨタ産業技術記念館を訪問した。館内には各セクションに解説してくれるスタッフが配置されているが、学生はただ説明を聞くだけでなく、事前の日本語の授業で準備していた質問をスタッフに投げかけながら、館内を見学して回った。

（８）日本研究④「現代社会と若者」

本学の学生（春季は愛知東邦大学の学生も参加）との交流会を行った。まず、グループに分かれ、自己紹介を行った後、アイスブレイクとして NUSTEP のティーチングアシスタントが考案したゲームを行い、場が和んだところで、留学生が自身で設定したテーマに関して本学の学生にインタビューを行った。インタビューの後は自由に交流する時間を設け、気軽に多くの人と話してもらい、最後に全体で振り返りを行った。

（９）ホームビジット

日本の実際の生活を体験してもらうため、国際教育交流センターアドバイジング部門の協力のもと、日帰りのホームビジットを実施した。ホームビジットへの

参加は任意であったが、多数の学生が参加した。夏季は名古屋大学附属中学・高校及び旭ヶ丘高校、春季は名古屋大学の学生からホストファミリーを募った。

事前にメールにて自己紹介のメールを送った上で、当日の対面式で各ホストファミリーと顔を合わせた。その後は各家庭に分かれ、それぞれの時間を過ごした。ホストファミリーの中には、最終発表会を見に来てくださったご家族もいた。

5. プログラムの評価と今後の課題

夏季、春季ともに、終了時に実施したアンケート結果からは、本プログラムが好評であったことが伺える。特に、日本の大学生や参加大学との交流に関する評価がこれまで同様に高かった。今年度は、本学学生などとの交流の機会を設けるとともに、参加学生同士の交流を活発化させるために全員のSNS（WeChat）のグループを作成した。その結果、プログラム期間中だけでなく、プログラム後も学生同士のやり取りが行われていた。やり取りに多くの学生が理解できる中国語が使用されることも若干あったため、その点についてはルール作りが必要ではあるが、2週間という短期間で学生同士が関係を深めていくことに一定の効果があったのではないかと考えられる。

宿舎については、今年度より、一社にある愛知東邦大学の宿泊施設「東邦ラーニングハウス」を利用している。大学までの通学に時間がかかることへの不満もあったが、参加学生同士の交流の機会が多いことや寮生である愛知東邦大学の学生との交流の機会があるこ

とから、満足度は高かった。寮生たちは歓送迎会を自主的に企画したり、プログラムのいくつかの活動にも積極的に参加したりしており、プログラムの質の向上にも繋がっている。その一方で、多人数の学生が一つの部屋に寝泊まりするため、ウィルス性の病気（特に2月はインフルエンザ）については十分に警戒する必要がある。夏季にはある学生が高熱を出し、急遽、宿舎内の個室に移動してもらった。病気への迅速な対応はもちろんであるが、学生に対してしっかりと予防促していくことも必要であろう。

NUSTEPは今年度で3年目に入り、安定的に応募が得られるようになってきている。参加者の多くがアジア圏の学生であることは昨年度までと変わらないものの、応募者がいるという協定校は徐々に増えており、広がりを見せている。また、一部の大学からはテラーメイド型のプログラムの要請も来ており、今後、どのようにプログラムの拡大を実施していくかが課題の一つである。合わせて、日本国内でもこのような超短期のプログラムを実施する大学が増えているため、引き続き、一定の学生を受け入れていくためには広報等について工夫も必要であろう。

昨今、以前プログラムに参加した学生の数名から、研究生や大学院生として本学に戻ってくるという知らせが届き始めている。現在、進学説明会の機会を設けているが、接続の観点からさらに何らかの機会を提供することができれば、より本学への興味を喚起することができると思われる。ただし、研究室訪問などについては調整に関する負担も大きいいため、導入については慎重に検討していきたい。